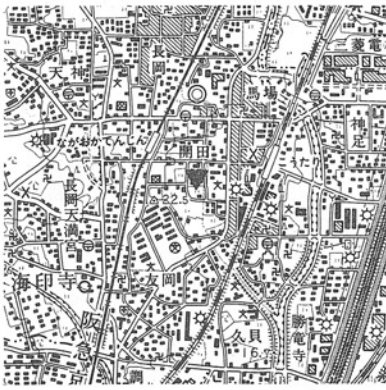


京都・長岡京跡 (2)

- 1 所在地 京都府長岡京市開田四丁目
- 2 調査期間 一九九二年(平4)八月～一〇月
- 3 発掘機関 長岡京市教育委員会
- 4 調査担当者 小田桐 淳
- 5 遺跡の種類 都城跡
- 6 遺跡の年代 長岡京期(七八四～七九四年)
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(京都西南部)

調査は長岡京跡右京第四一〇次調査として実施した。調査地は、阪急長岡天神駅とJR神足駅のほぼ中間に位置し、長岡京市内を南流する大川の西隣りにあたる。地形的には大川の後背低地にあたるところで、調査対象地の三面の水田は東の大川に向かって順次低くなっている。ここは右京六条二坊五町の宅地推定地にあたる。同町内では今回が初めての調査である。

調査によって検出した遺構は、南北溝二条と東西小溝三条である。これらの溝のうち、五町のほぼ中央に位置する南北溝二条は一・六mを隔てて並行するが、時期差があると考えられる。このうち木簡が出土したのは南北溝SD四一〇〇五からである。

溝SD四一〇〇五は一〇mにわたって調査しているが、幅一・七mで深さが〇・三～〇・五mの規模で、溝の西肩には長さ二・六m、幅一五cmの板材によって護岸施設が設けられていた。堆積土は砂と粘質土との互層からなっており、かなりの流水がうかがえる。これらの堆積土とは別に、一部で木製品を多く含む粘質土層が溝底にかけて堆積していた。木簡を含むほとんどの木製品はこの層から出土している。木簡以外では木履、斎串、人形、箸などがある。箸のなかには木簡を加工したものもある。

この層を押し流すように堆積している砂層からは多くの土器類が出土している。そのなかには「二」「大」「岡」「⊕」「□器」などの墨書やヘラ書き土器が含まれている。

8 木簡の积文・内容

(1) ・「謹啓 申×

右米五斗×

・「誠石成
米九

(62)×(30)×4.5 081

(2) 「金銀」^{〔帳カ〕}

(88)×(30)×(4.5) 061

(1)は文書様木簡の断片で上下とも刀子によって斜に切れ目を入れて折られ、左端は割れている。表面は刀子によって削られて墨が部分的に薄くなっている。

内容は、表面は米を請求するものと考えられ、また裏面は検討を要するが、人名の可能性が考えられる。

(2)は左端が割れており、裏面は割り裂いたままで未調整である。右下端が切り込まれ、中央部に突出部があることから題籤になると考えられる。

これ以外に箸状に二次加工されたもので、両者とも表裏に墨痕が認められるものが二点出土している。

以上四点が出土した木簡であるが、(2)以外は二次的に加工されたものである。(2)の内容や(1)の木簡、木履などから金銀の出納に関係する役人が当町内にいたことが窺われる。

9 関係文献

小田桐 淳「長岡京跡右京第410次調査概要」(長岡京市教育委員会『長岡京市文化財調査報告書』三一 一九九三年)

(小田桐 淳)

